

2012

平成 24 年 9 月 発行



J・A・C

公益社団法人

日本山岳会 千葉支部

千葉支部だより

発行者 篠崎仁

編集者 結城純一

(第 20 号)

富士・御中道大沢崩れ見学会



期 日 2012年8月5日(日)

参加者 三木雄三、山口文嗣、小板橋志朗、結城純一、豊倉さと子、小澤けい子、湯下正子、山崎完治、岩尾富士夫、石岡慎介、谷内剛、杉本正夫、折田幸一、矢野賢二、井上元、香高真奈美。

順不同・敬称略

先般的那須・三本槍が天候不順で中止となり、最近山にご無沙汰のところ、三木さんから御中道へ行こうと声がかかり、急遽かき集められた16名が千葉発の“あずさ3号”に乗り、富士山駅(旧富士吉田駅)からバスで御庭下車。トイレが水洗でキレイ。ここより御中道まで、四角い自然石をしき並べた遊歩道を上がって行く。途中三木さんより、火山礫・植生・カラマツのことなどレクチャーをうける。御中道に上がると砂礫の道になる。至近で見る山容はガサ

ガサ感がある。これから行く所は600年前の噴火で堆積した黒や赤のスコリア(軽石)で形成されている。この御中道は享保(1700年代)の頃開かれ、困難・危険であったため深い信仰心と、勇気がなければ歩けなかった。三度以上の登頂者でなければ許可されない聖地で、富士講として巡拝できた者には栄誉が与えられた。とくに大沢の横断は命がけであった。今回はその富士大沢の崩れ(大崩壊)を見にこうじゃないか、と云うわけである。

そこから少し行って“おおさわくずれ“の案内に従い左の山道に分け入る。シャクナゲの薄ピンクの花が咲いている。だんだんと植生が濃くなり、この辺(2300～2400m)では、森林限界が2700～2800mに達しているため、まるで森林の中である。この道は沢を横断するところをのぞいて、概して歩きやすい。滑沢(なめさわ)にかかる。



対岸まで火山礫の急斜面が広がり、上部はガスがかかり見えないが、落石が心配で敏速に渡る。次が仏石流しで同様な情景である。

途中、小沢をアルミの階段などで通過、ここから徐々に下り、大沢休泊所(2317m・助ヶ室⇒お助け小屋といわれた)に到着した。先着の人々がいて、昼食にする。休泊所は無人であり利用できない。砂防工事に利用されている様子。空身で大沢崩れを見に行く。



三ノ越はこの下方に位置する。ガスで見えなかったが左手の山頂直下から崩壊が始まり、下方標高2200m、長さ2100m、深さ最大150mに達する。目の前の現場は崩壊の様子から、噴火のごとの溶岩・火山礫が何層にも重なり崩れ行く様が見える。対岸まで500m、そして対岸はここより相当高く、以前より大幅に拡大している。静岡大学防災総合センターのホームページに崩壊の推移があり、将来の予想図があるので、覗いてみてください。往路を戻り、途中シャクナゲの群生地写真を撮り、御庭から五合目のバス停に向う。このへんは森林限界が下方にあり、砂礫の道である。左下にスバルラインが見えると、バス停に到着。大勢の登山者が行きかい、富士登山真っ盛りであり、登頂したものは誇らしげな様子である。バスで河口湖そこから電車を乗り継いで八王子、ここから“あずさ30号”で千葉に帰着した。駅でアルコールを買い込み、列車内で反省会を挙行了しました。

(岩尾富士夫)

千葉支部ビールパーティに参加して



期 日 2012年 8 月 18 日(土)

参加者 竹島正義、土屋満、高橋正彦、浜口欣一、黒田正雄、篠崎仁、塩沢厚、小疇尚、坂上光恵、高田春男、山口文嗣、結城純一、鈴木美代、前田栄三、大悟法雄作、小板橋志朗、柳下忠義、豊倉さと子、小澤けい子、諏訪吉春、矢野賢二、田代貴征、湯下正子
以上 23 名

ロンドンオリンピックも終わった 8 月 18 日、柏高島屋屋上のビアガーデンで JAC 千葉支部の納涼会があった。JAC 千葉支部参加者 23 名もほぼ満席の会場に飲み込まれて、大いに盛り上がった。主流は若い人たちのグループが圧倒的に多く、JAC 千葉支部が参加者の平均年齢を押し上げたかもしれない。生ビール飲み放題とあって昼間のピカピカゴロゴロから一転、スカイツリーもはるかに望まれる心地良い夜風の屋上は八ヶ岳の稜線上での飲み会のように愉快で爽やかだった。

セルフサービスの生ビールの行列に何回往復したことか、かなり大声で喋らないと話も通じない声のパワーに圧倒される。

早めに着いた私は高級品で名を売的高島屋をひとめぐり、円高ユーロ安でどれほどの恩恵を受けているか分からないが高級舶来腕時計の値段にタメ息、9 千円のわが電波腕時計が一番と胸を張り、へき地成田は遠いと思った。

帰りは同じ成田にお住まいの小板橋さんとご一

緒に、今時珍しい我孫子から単線の成田線で酔いを醒ましながらの帰宅となった。

日本中のJAC千葉が 10 月に集う九十九里海岸での全国支部懇談会が間近となった。私も老骨ながら何かお手伝いできたらと参加に手を挙げた。JACの旗のもと全国から山仲間が千葉を目指す支部懇談会を考えると胸がおどる。懇親会成功のために篠崎支部長はじめ役員さんたちのボルテージもかなり上がっているはず、最高峰 408 メートルでも千葉はよかった、との最高の思い出作りに千葉支部が全力を上げる体制を整えたい。遠い支部の仲間たちのお国自慢やお国言葉も楽しみだし、心のこもった

おもてなしで山の仲間が増えるのが待ち遠しい。一杯、一杯、また一杯で旨い酒盛りになるのは間違いない。酔いさましに太平洋の満天の星を仰ぐのも良い。そのために 10 月 20 日は是非晴れて貰いたいのが千葉支部全員の願いだ。

(高田春男)

群 別 岳

今からもう20年ほど昔の1991年夏、雨竜沼湿原から南暑寒別岳、暑寒別岳を縦走したことがある。そのときに、この増毛山塊には西側にもう一つの山脈があることを知った。群別岳から浜益岳、雄冬山と連なる、見た目にはなだらかな連峰で魅力的だが道がない。登るとすれば沢登りか山スキーである。あの山々をスキーでたどったらさぞかし楽しいだろうと思いながら増毛に下った。

久しく忘れていたこれらの山が再び意識に上ったのは、昨年8月、三度目のトムラウシに登ることになった時で、その帰りに、群別川から登る予定を立てた。しかし、前年、大量遭難騒ぎがあったトムラウシの気象条件がこのときも厳しくて体力を消耗し、結局断念してしまった。

そして、今年、最も条件的には良さそうな5月の連休にスキーを担いで出かけた。札幌からレンタカーを借りて、夕方、国道231号の群別橋の北から林道に入った。3キロメートルほど走って群別川を渡り返したところに1台の車が停まっていた。人の気配がしなかった。ややスペースがある場所なので、近くに駐車して、徒歩で道の先を調べてみた。すぐ雪が出てきて、深い水溜りがある。乗用車ではここが限界だ。

その夜は月が出て、星も見えた。しかし、翌日の天気予報は曇りのち雨であった。太平洋の南から低気圧が近づいてきていた。翌朝、4時頃起きてみると西からしきりに黒い雲が流れていた。驚いたことに、無人と思っていた車から男性が降りてきて、声をかけられた。北見在住の人で、昨日は天気が良くて、何人か登っている人がいたという。「いけるところまで行ってみますか」ということに意見が一致して、4時半、一足先に出発した。

万一の場合ビバークできる用意をし、ピッケル、アイゼンを持ち、スキーを担いだ。今年は雪が多いということだったが、林道の雪は溶けてやわらかくなっていた。溶けた場所にはフキノトウがもうだいぶ大きくなっていたが、木々の芽吹きはまだだった。

3キロメートル歩いて再び右岸に渡る。コンクリートの橋はその部分だけ雪が溶けてプールのような水溜りになっている。青々として水量豊かな群別川は、白いしぶきを上げて奔放に流れ下り、渡渉など思いもよらない。ほどなく右の急斜面から剥がれ落ちた雪のブロックが道をふさいでいた。乗り越えるしかないが、雪崩には細心の注意が必要だ。

2キロメートルほどで林道が終わったような気配があるが、その境目がはっきりしない。

そのまま谷沿いに左寄りに登っていく。いったん谷に下ってからトド松の林の急傾斜を再び登り返し、やがて樺の疎林の中の緩斜面となる。ここからスキーを履く。正面はるかに群別岳下部の岩峰が見え出す。その先で左右から二つの沢が滝状となって落ちていた。ここで大休止をとる。ここまでで4時間かかっていた。

曇り空でやや風があるが、時々薄日が差し、雨はすぐに降りそうには見えない。北見の人がゆっくりと登ってくる。年齢は私より一回り下のようなのだが、山には高校時代から登っているという。「上は風が強そうだ」と言う。ここから再び急斜面となるので、スキーはデポし、アイゼンをつけ、ストックをピッケルに持ち替える。

頂上まで1時間半程度という予想は見事に外れて、岩峰の基部に着くまでに予定時間が過ぎてしまう。2、30歩ごとに立ち止まってはひと息入れないと登り続けることができない広大な斜面である。ハイマツに覆われた岩峰の基部からは西に、浜益岳だろうか、たおやかなピークが望まれた。ここまでは晴れていた。それから天候は徐々に崩れていった。

岩峰は東側を巻くはずだった。しかし、雪が切れ、岩が露出している。しばらくアイゼンを脱ぎ、また雪が現われたところで再び履いた。困ったことにベルクシュレントが口を開けていた。トラバース・ルート

はずっと下なのだ。岩壁と雪溪の間のシュルントはさほどの深さはなく、雪溪の先端は踏み破るほど薄くない。注意しながらこの雪溪の先端部を渡っていくことにした。少し下部にクレバスが開いているところがあり、その下は背筋がぞくぞくするような急斜面である。

雪がしっかりしているところを見定めてピッケルを深く差し込み、三点支持を確保しながらそろりそろりと前進する。万一滑落したら止められるだろうと思う。軟雪であるのが救いだが、おそらく無事ではすまないだろう。たとえ無事でも、長い時間をかけて登り返さなくてはならない。時間にして 10 分か 15 分くらいだったろうか。この難所を通過して、安全な尾根に出た。

ここで岩場は終わり、その先は片側に笹とハイマツが露出している雪の尾根をたどる。傾斜は相変わらずきつい。緊張を解き、力を回復するためにしばらく休む。風が強まっていた。30 分はかからなかっただろう、雪溪の登りが終わった。ハイマツが行く手をさえぎっている。よく見ると、人が通ったと思われる隙間がある。それを踏み分けていくと群別岳の頂上だった。12 時 15 分。三角点と山名表示板があった。こがね山岳会が立てたもので、白木の板を彫ったものだが、すでに灰色に風化してしまっている。

そこだけぽっかりと開いた空間がなんとも好ましい。雲霧に覆われて展望は望むべくもないが、心の中に深い喜びが湧いた。ようやく来たと思った。朝歩き出してから 8 時間近く、いや、初めてこの山を目にしてから 21 年目である。その間、もちろんこの山のことばかり考えていたわけではないが、これでやっと一つの懸案が解決し、一つの輪が閉じた。

来年は古希を迎える。まだこのくらいの山なら登る体力はありそうだ。70 歳、あるいは 80 歳になったら、もう一度、今度はイタリア側からマッターホルンを登ってみようなどと考えたこともあったが、最近は、特別な意味づけなどは不要なことだと思うようになった。ただ自分が登りたい山を自分が思うように登ればよいのである。自然は人間に無関心だというのが、そして確かにその通りだと思うが、自分は本当に自然が好きで、最も野生の自然に触れることができる方法が登山というだけのことである。

これほど立ち去りがたい思いがした山頂も少ない。北の山であり、久恋の山であり、予想以上に困難な山であったためかもしれない。しかし、きりがないので 15 分と決めた滞在時間が過ぎた 12 時半に下山を開始した。

往路に苦労したトラバースは、下を通ればはるかに楽であった。北見の人は岩峰までで引き返したらしい。靴跡だけで、アイゼン、ピッケルの跡がない。それら無しで登り続けることはほぼ不可能で、さらに雨が落ち始めていた。

前日にも人が登っているということだったが、その跡はすぐに消えてしまう。場所によっては雪が変色しているのでそれと分かるが、雪の上に泥が付いているような所では、足跡がどうかにわかには定めがたい。一度はルートを見失って、苦労して戻り正しいルートを発見した。スキーを担ぐようになると、その重さが応えたが、夕方 6 時過ぎ、何とか無事に車に帰り着くことができた。

(川島 由夫)

●会友の近況報告

高山植物に魅せられて…

7月21日、新宿発の夜行バスに乗って、花の百名山「三ノ沢岳」に向かった。

22日早朝千疊敷駅に到着。久しぶりに目にした荒々しい宝剣岳とまだ雪渓が残り広々とした千疊敷カールとのコントラストがすばらしい。

6時20分、いよいよ登山開始。2500mからの登りは体が慣れていないせいかすぐに息があがる。でも登山道の脇には、早くも小さな花々が可憐な姿を見せて励ましてくれる。白い花のゴゼンタチバナ、岩陰のコイワカガミの鮮やかなピンク、黄色がまぶしいミヤマキンポウゲ。キバナシャクナゲはまだ咲いているし、タカネナナカマド、ウラジロナナカマド、ハイマツの雄しべ雌しべなど初めて見る花も多い。

辛い30分の登りを乗り切り極楽平へ。ここで私が一番会いたかった花、コマウスユキソウと対面！なんて可憐なんでしょう。他にもハクサンイチゲ、チングルマ、ミヤマクロユリ、アオノツガザクラ、ハハコヨモギ、イワツメクサ、ミヤマツメクサ、なんとチョウノスケソウまで稜線上の岩陰に身を寄せ合うようにして出迎えてくれた。そして、三ノ沢分岐へ。これから登る「三ノ沢岳」がどっしりとした山容を見せていた。山頂までは足が届かないような岩場のアップダウンを3回ほど繰り返して進んだが、その間花々が途切れることがない。足元のクロマメノキ、ツガザクラ、シラタマノキ、コケモモ、マイズルソウ、イワヒゲ、イワウメ、等々に元気をもらった。

いよいよ頂上。その直下にはさらにすばらしいお花畑が待っていた。「三ノ沢岳」のお花畑は谷に向かって広く、下へ下へと緑と花のじゅうたんが果てしなく続いていくような、そんな感じなのだ。何時間でもここに留まって包まれていたいような…

9時20分、一等三角点到着。まさに花時に訪れたさすが花の百名山。心に残る大満足の山行だった。



そんな一日を近況報告とした私は、千葉支部会友No.7。13年前、知人に大菩薩へ連れて行ってもらったのが、本格的？に山歩きをするきっかけのまだまだ山女初歩人です。それでも今まで山歩きを楽しく続けてこられたのは、大菩薩後に山を通じて知り合った現千葉支部副支部長の三木さんとその仲間達との出会いがあったからです。その当時は私自身が日本山岳会という組織に関わることなど想像もできませんでしたが、三木さんが会員になることによって、私までもがよい体験と出会いの場を与えられたことにとっても感謝しています。千葉支部の皆様と行動を共にしたりお話を伺って、山の楽しさだけでなく自然や環境のことまでいろいろ考えさせられることも多くなりました。まだまだ経験も知識もない私ですが、皆様とのあたたかい交流を通して成長したいと思っています。これからもよろしく願いいたします。

(高橋琢子)



(頂上から「三頭山」方面を見る)

大菩薩から高尾山へとつながる長大な尾根。奥多摩三山の主峰・三頭山から南下しているのが笹尾根だ。赤や黄色の落ち葉を敷き詰めた尾根は静寂そのもの。11月の山行は、そんな笹尾根の支尾根にある大羽根山(992m)を歩きます。山といっても、小さなピークがあるだけで、ここだと言わなければ通り過ぎてしまうような所。しかし、藪が切り開かれて、北面には三頭山や御前山、特徴ある大岳山が紅葉の枝越しに望めます。西原峠からは檜原街道を目指して下り、『美人の湯』で知られるアルカリ単純泉の「数馬の湯」で疲れを癒やします。紅葉と温泉。ほんの少し贅沢な気分を味わえる山旅です。

期 日 2012年11月23日(勤労感謝の日)

集 合 JR 武蔵五日市駅前に午前9時。(新宿午前7時44分発のホリデー快速『奥多摩・あきがわ1号』に乗車すると、午前8時48分に到着。拝島駅で奥多摩方面と車両の切り離しがあります。わたしは先頭車両に乗車します)。

切 符 JR「休日おでかけパス」(2600円)がお得です。

コース概略 武蔵五日市駅～浅間尾根登山口(バス1時間)。登山口～大羽根山～笹ヶタワ峰～西原峠～数馬温泉～武蔵五日市駅。約4時間(休憩含む)。小雨決行。バス代、入浴代を用意して下さい。

参加希望者は11月16日までに下記担当者まで申し込んで下さい。

担当者 三木 雄三

忘年山行・景信山～裏高尾縦走



(景信山からのパノラマ)

低山ながら展望に優れた景信山(727^{メートル})に登り、そこから小仏峠、城山(670^{メートル})と『裏高尾』と呼ばれる尾根道をミシュランでも紹介された自然が豊かな高尾山(599^{メートル})まで小縦走します。相模湖の上に富士山や丹沢方面が一望できる城山では、名物の「おでん」「ナメコ汁」をいただきます。心もからだも温まります。天候に恵まれれば、新宿副都心やスカイツリーを見ることもできます。さらに高尾山へと歩をのびし、『天狗さま』で有名な薬王院を参拝。今年の山行の無事を感謝し、厄落としをします。これで来年は素晴らしい年になること受け合い。もちろん、『反省会』付きです。

期 日 2012年12月 15 日(土)
集 合 JR 高尾駅改札口付近に
午前9時30分。
切 符 JR「休日おでかけパス」
(2600円)がお得です。



コース概略 JR 高尾駅～小仏(バス15分)。小仏～景信山～小仏峠～城山～一丁平～高尾山。京王線高尾山口(電車5分)～JR 高尾駅。約4時間半(休憩含む)。

参加希望者は11月30日までに下記担当者まで申し込んで下さい。

担当者 三木 雄三

冬山のおしらせ



千葉支部初めての冬山山行として、北八ヶ岳の北横岳(2480m)、縞枯山(2403m)を登ります。冬の蓼科山、赤岳や諏訪湖、北、中央、南アルプスなどが遠望できます。
初めての人は新鮮な感動を、経験者はそれなりの充実感を得られます。

期日:2013年 1月12日(土)~13日(日)

日程: 12日 茅野―バス―北横岳ロープウェイ―縞枯山―縞枯山荘(泊)

13日 縞枯山荘―北横岳往復―(歩き)―山麓駅―バス―茅野

八ヶ岳は気温が低く冬期用の装備(靴、アイゼン、ピッケル又は雪用のストック、靴下、手袋、ウェアなど)が必要です。小屋泊まりなので、寝袋はいりませんが、山岳保険は必須です。

参加希望の方は、連絡を下さい。詳細は改めてご連絡いたします。

装備などについても、ご相談に応じます。

担 当 岩尾 富士夫

房総半島の分水嶺踏査への参加のお誘い

今年の3月25日に内房線を越え、館山市の県道188号(館山千倉大貫線)まで到達し中断していた房総半島の分水嶺踏査計画を11月3日(土)から再開いたします。

房総の分水嶺もいよいよ最終段階に突入し、館山市と南房総市境から西に向きを転じ、房大山から洲崎に向かいます。

今年もより多くの会員・会友の皆様にご参加いただけるよう、予めスケジュールを支部だよりに掲載するよう計画いたしました。今シーズンでの完全踏査を目指していますので、皆様奮ってご参加いただくようお願いいたします。パズル解きのような房総の山の読図に挑戦してみませんか。

期 日 ①11月3日(土) ②11月11日(日) ③12月8日(土)

④12月22日(土) ⑤1月6日(日) ⑥1月19日(土)

申込締切 ①10月25日(金) ②11月2日(金) ③11月30日(金)

④12月14日(金) ⑤12月28日(金)

予定コース 今回は未知の部分が多いので、予定コースは未定です。

申込先 山口 文嗣

参加者数によって使用交通機関・集合場所・時間等決めます。参加希望者は実施日前週の金曜日までにご連絡ください。

●日本山岳会団体傷害保険のご案内

6月号の会報で日本山岳協会の山岳保険を紹介しましたが、今月号で日本山岳会団体傷害保険のご案内をいたします。

加入対象者(被保険者)は日本山岳会員で、会員が加入の場合は、配偶者、子、両親、兄弟、会員本人の同居の親族及び同居の使用人もご加入できます。詳しくは、下記のところへ電話なり、FAXにておたずね下さい。

東京海上日動火災海上グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京

TEL:0120-161-808 FAX:0120-181-809

● 編集後記

今回の1面には「那須三本槍」を掲載しようと考えていた。ところが中止になったと聞いて、トップの原稿が無く困ってMさんに相談したら「山行計画立ててあげるよ」と言って頂き、急きょ決まったのが富士山大沢崩れでした。急な山行計画を作ってくれたMさん、山行に参加してくれた会員、会友のみなさん 本当にありがとうございました。また連絡不備で届かなかった会員会友さんには お詫びを申し上げます どうもすみませんでした。

(結城純一)